

川崎医療短期大学の教育・学生生活に関するアンケート(卒業後アンケート)

1. 川崎医療短期大学の教育・学生生活に関するアンケート（卒業後アンケート）概要および結果

1) 調査期間

令和3年8月

2) 対象者属性

◆学科（カッコ内は回収率）

- ・看護科 卒業生 82人（59.0%）
- ・医療介護福祉科 卒業生 7人（58.3%）

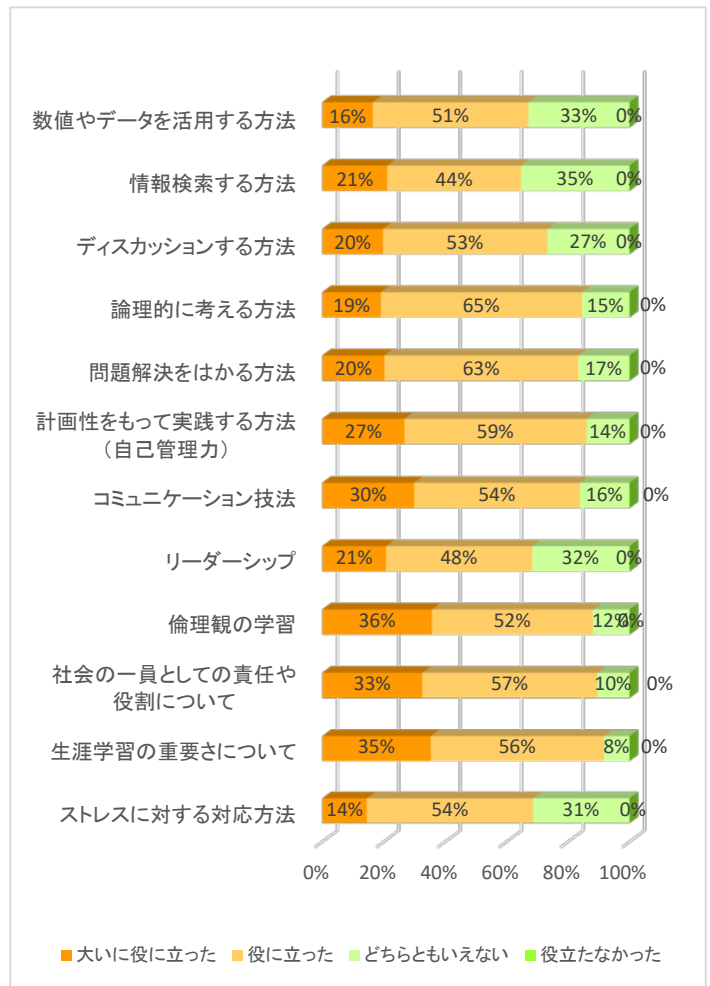
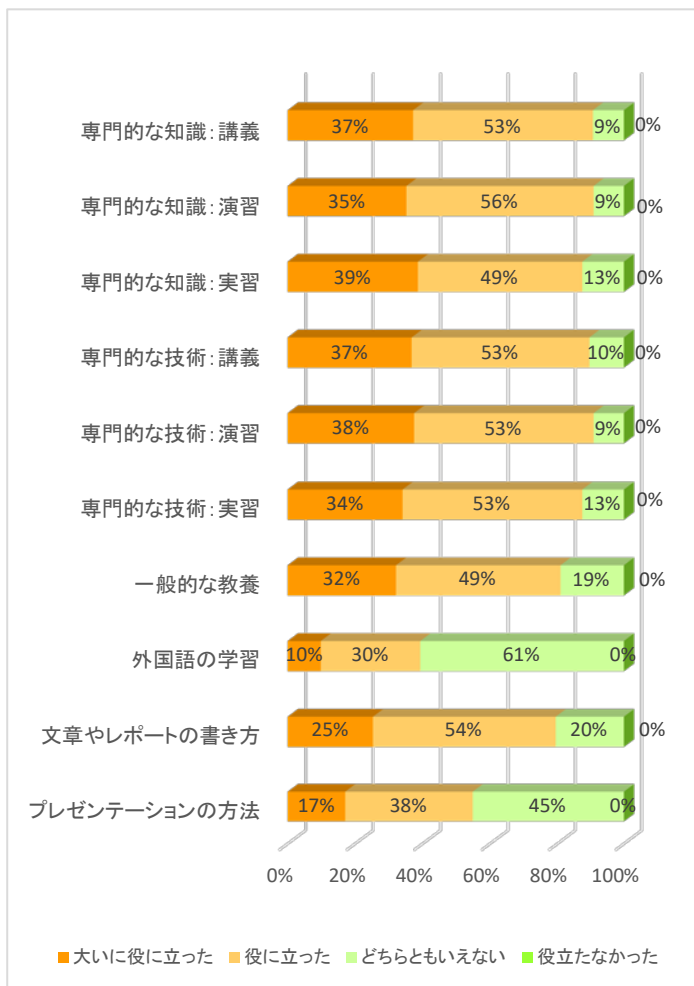
◆進路（4月段階）（カッコ内は割合）

- ・就職 87人（97.8%）
- ・進学 2人（2.2%）

3) アンケート結果

A. 学生生活全体について

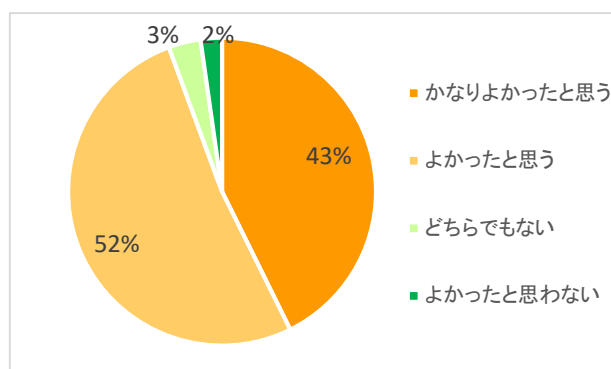
1. 在学中の本学の教育について



1-その他気になる点（2件）

職場ではパソコンでの操作が主であるため学校生活でもワードやエクセルを使用した学習や課題がもう少しあっても良いと思った。人体の構造と機能などはわかりやすかったが、プリントを読んでいくだけの授業はわかりにくかった。

2. 本学の学びの評価



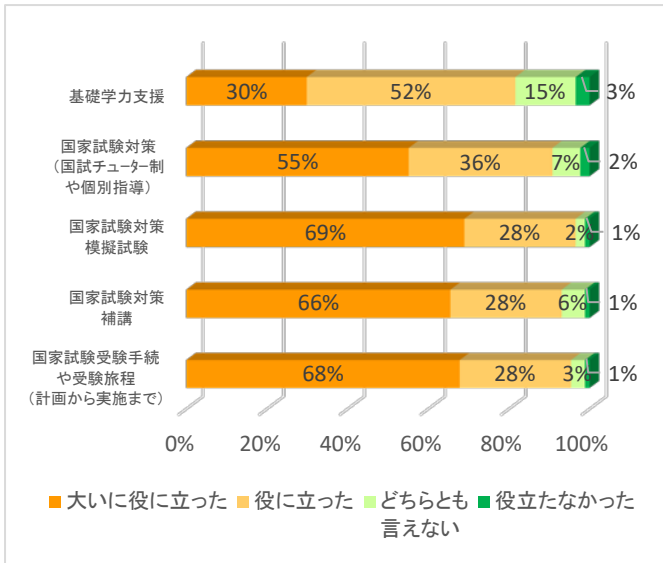
<本学で学んでよかった理由> 自由記載 29件

- ・テスト期間はしんどかったけれど一般教養もたくさん学べたから。 ・質問しやすい環境であった。
- ・大変だったけど振り返ってみたら充実した3年間だったから。
- ・4年制と比べて忙しい学校生活ではあったものの勉強する時間ばかりでなく遊びやアルバイトなど自身の見識を広げる時間も取れるカリキュラムだった。
- ・患者さん、利用者さんの気持ちを第一に考えながら実習ができた。 ・仲の良い友人ができたから。
- ・良い先生たちだったから。 ・親身になってくれた(2)。 ・協力的だった。 ・A先生がよかった。
- ・熱心に講義をしてくれた。 ・実習でつらい時先生が励ましてくれた。
- ・指導熱心で寄り添ってくださる先生方にお世話になれて嬉しかったから。
- ・先生たちに勉強面、精神面等助けられたことがたくさんある。
- ・時間管理や授業に追いつけるよう必死に努力する力が身に付いた。
- ・臨地や学内実習で学んだことが実際の現場で生かしていることが多い(2)。
- ・学んだことが就職して役立っているから(3)。 ・医療的なことも学んだため多職種連携ができていているから。
- ・実習中に先を考えて行動することや優先順位を考えることが看護師になって役立っているから。
- ・附属病院があったことでコロナ禍でも実習に行けたから。 ・就職先の職場のことが学べたため。
- ・コロナ禍でインターンシップ等が中止されているなかで希望する就職先で実習が行えた。
- ・コロナで実習がなくなったこともあったが他の看護学校と比べると良く実習ができたから。

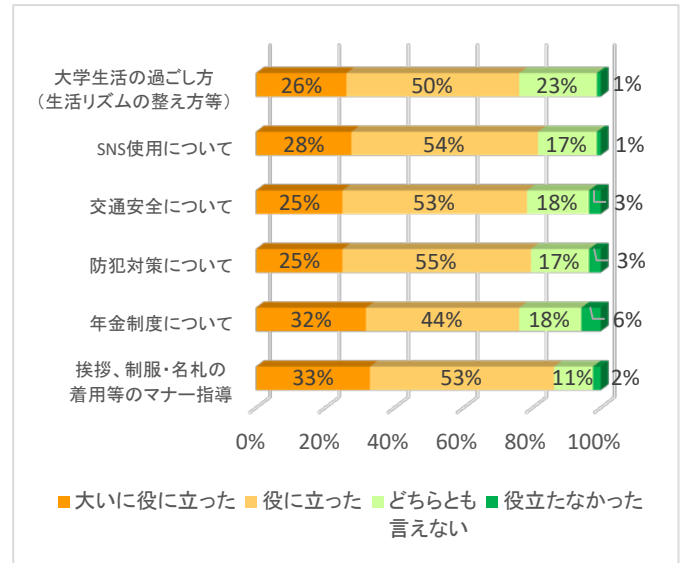
<他に本学で学びたかったこと> 自由記載 5件

- ・申し送りの方法 ・手術室の見学実習 ・在宅・精神(コロナ禍で実習に行けなかった)の見学実習
- ・もっと実習に行って学んでおきたかった ・パソコンでの看護記録記入

3. 在学中の教育的サービスについて



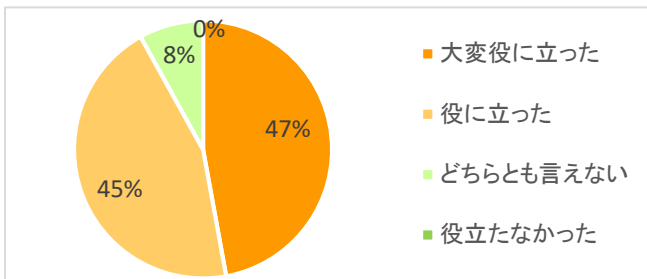
4. 在学中の学生生活支援サービスについて



4-その他気になる点

服装に対して厳しすぎた。先生によって言うことが違う。

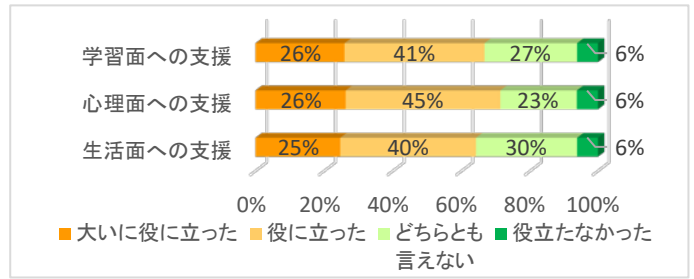
5. 担任制度について



5-その他気になる点

何でも聞けるし相談できる。
とても良かったです。

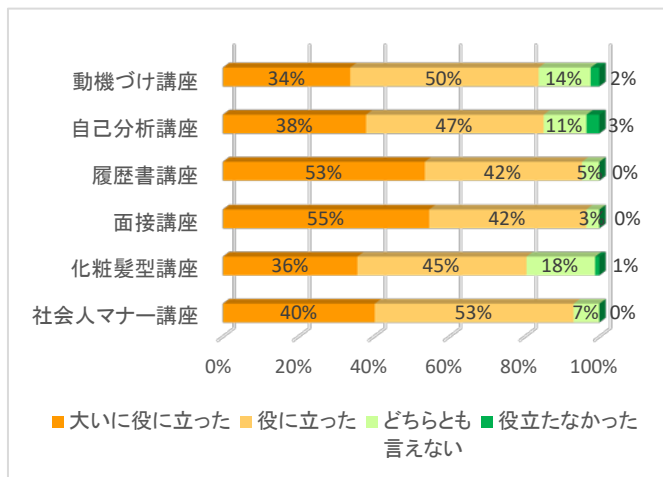
6. アドバイザー制度について (看護科のみ)



6-その他気になる点

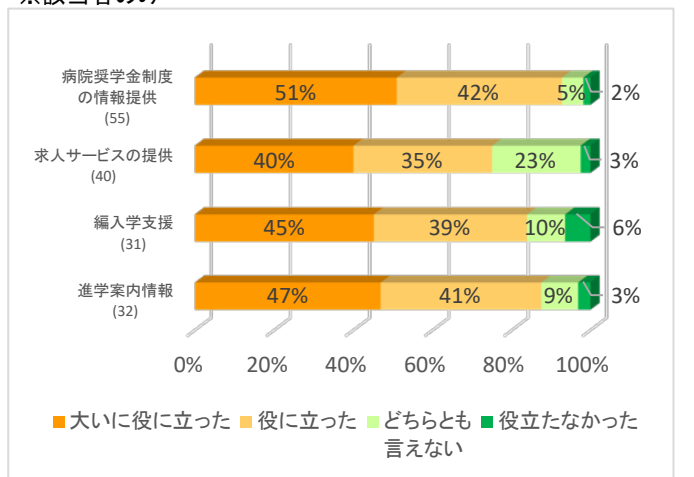
あまりアドバイザーと関わることがなかった。
悩んでもう勉強するもの諦めそうになった時に
励ましていただきました。

7. 就職・進学支援について



7-その他気になる点 なし

※該当者のみ



8. 在学中にできなかったことで、学生時代にして良かったこと

- ・ BLS ・ 謝恩会 ・ 卒業旅行 ・ サークル ・ 部活動などで楽しめたかった (3)
- ・ 在宅実習と病院実習 ・ 青春！ ・ 学祭 ・ もっと遊んだりしたかった ・ 泊まりで勉強会

まとめ 学生生活について

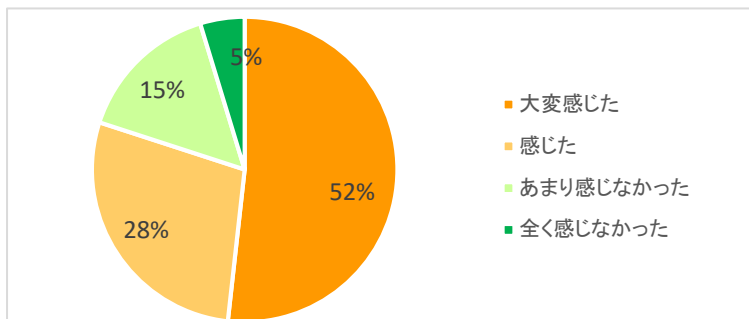
医療・福祉職養成のための教育に対する評価は高かった。また国家試験対策は、卒業後の就職や業務内容にも直結するため、それらに対する教育サービス（国家試験対策）を行うことに対しては評価が高い。それが本学で学んだことに対する高い満足度につながっていると考えられる。少数意見だが、自由記述の中に就職後のためにパソコン操作の教育を希望している学生もあり、課題をパソコンで作成するなど、学生のうちから操作に慣れる必要性を感じた。

生活支援に関する講座はいずれも役立っているとの回答が多く、時期やもち方を検討したうえで継続していくことが望ましいと考える。

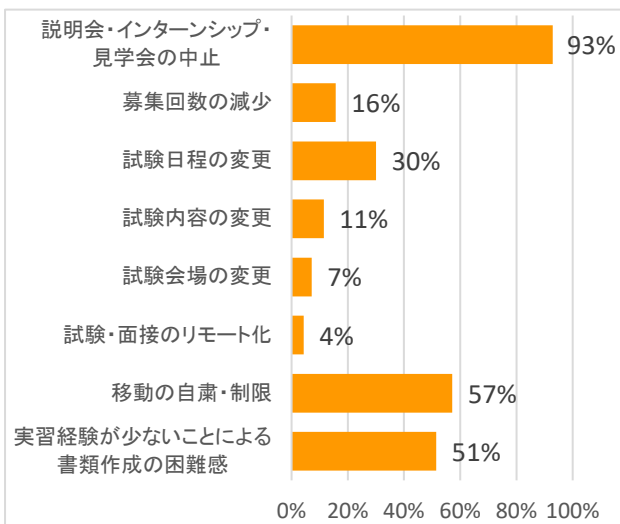
担任制度はほとんどの学生が役立っていると評価しており、日頃より関わりの深い教員からしっかりとしたサポートを受けられている実感があるのではないかと考える。それに比較するとアドバイザー制度はやや低いようにも見えるが、過半数は役立っていると評価していた。担任教員と比べると関わりが少ない点や、アドバイザーは1年のみの制度であることから記憶が薄れている点などが影響しているのではないかと考える。アドバイザー制度は入学から間もない学生の履修指導や生活指導などが少人数対象でおこなえるという利点があり、実習や就職等で担任以外に相談できる場所があっても良いと考えるため、継続が望ましいと考える。

B 新型コロナウイルス感染症の進路に対する影響

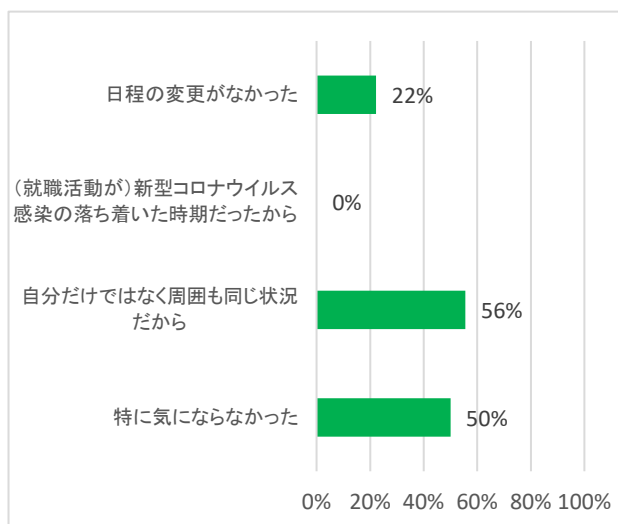
1. 就職活動 新型コロナウイルスによる影響の有無



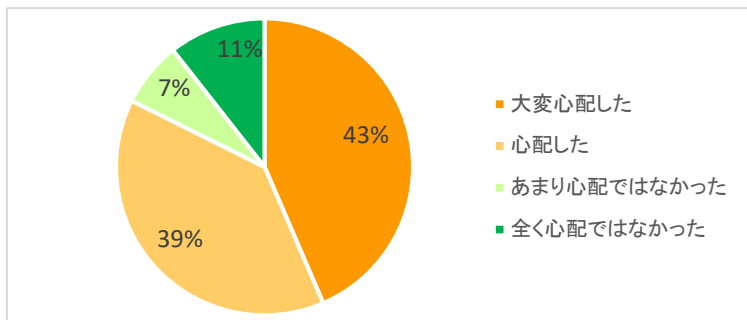
1-a 影響を受けたと感じた事象 (70件)



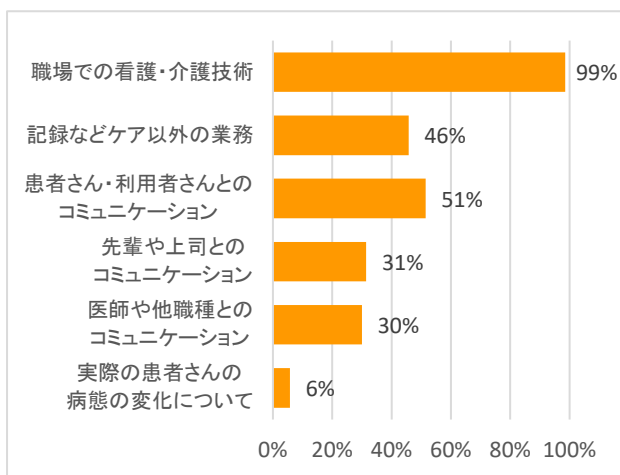
1-b 影響を感じなかった理由 (18件)



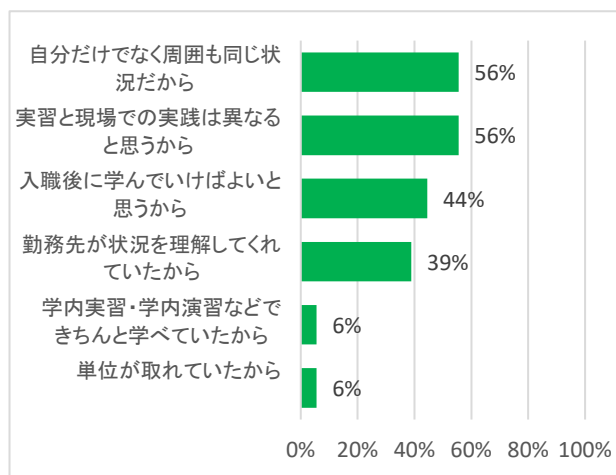
2. 入職前 学外実習の中止・短縮が仕事に影響する心配 (85 件)



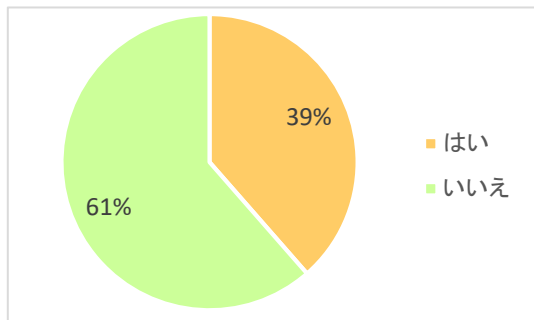
2-a 「大変心配した」「心配した」内容 (70 件)



2-b 「あまり・まったく心配しなかった」理由 (18 件)



3 入職後、学外実習の中止や短縮を補うための例年とは異なる特別な配慮や研修等の有無 (83 件)

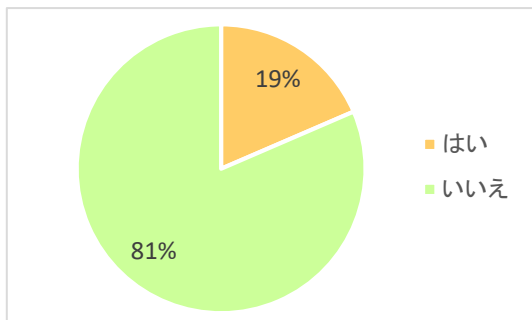


3-a 例年とは異なる特別な配慮や研修 (13 件)

- ・ 研修期間が例年に比べ長かった。(4)
- ・ 各病棟のローテーション研修など追加の研修があった (2)。
- ・ ゆっくり指導してもらっている。
- ・ 基礎的な技術を 1 から研修で教えていただいた。
- ・ 院外での研修がなくなった。
- ・ 研修を午前と午後で分けて行われている
- ・ 例年は集まってしていた研修を今年は各部署に分かれて行い、プリセプターや教育委員の方が中心となって研修をしてくださった。また、先輩についてシャドーイングを行う期間が長く、先輩方の仕事や技術の見学が多くできた。
- ・ 2 か月間各病棟を回り科を選ぶことができ、その際に学生時代にできなかった基礎的看護技術取得期間もあった。
- ・ 教育担当の主任さんが部署の看護師全員に、例年のように臨床を経験していないため丁寧に説明するよう言ってくれた。

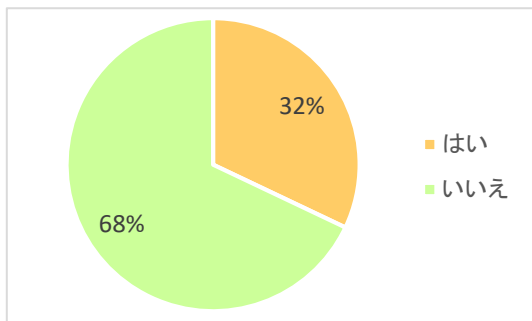
4. 学外実習の中止や短縮による良い影響の有無（現在）（4件）

4-a 良い影響ありの場合の理由



- ・業務や技術を少しずつ進めてくださるから。
- ・看護のための講義や研修が2週間毎日あったこと。
- ・実習と働くのでは全然異なる。
- ・実習経験は大切であるがそれほど心配することではなかった。働きだしてからがすべて。正直看護学生時代の実習経験は関係ないと思った。

5. 学外実習の中止や短縮による良くない影響の有無（現在）（17件）



5-a 良くない影響ありの場合の理由

- ・実際の看護展開が難しい。
- ・看護技術や臨床で必要となる知識の不足（2）。
- ・あまり経験していない看護技術で苦戦した。
- ・ケアなどの経験が少なかったから。
- ・技術が身につけてないと思った。
- ・臨床で行われている実際の看護技術がわからない。
- ・現場での経験不足。
- ・経験が少なかった。
- ・実際の看護師の働き方や患者さんとの関わり方を見る機会が減ったから。
- ・患者さんとのコミュニケーション方法をもっと実習で勉強したかった。
- ・例年に比べて即戦力が低いと思うから。
- ・病院の雰囲気、学生時代どう対処してたんだろうと考えられない。
- ・先輩からコロナ期間の実習生だから何もできんよねと言われる。
- ・臨床に出るときの緊張感が大きかった。普段ならできることもできなくなるんじゃないかと不安があった。
- ・他の総合病院附属の看護学校は実習を続けていたので、私が経験のない診療科に就職して知識の差を感じた。

まとめ 新型コロナウイルス感染症の進路に対する影響について

アンケート対象の卒業生は、新型コロナウイルス感染対策を模索するなかで学外実習・就職活動の時期を迎えており、それに関する影響を大きく受けていた。就職説明会やインターンシップの中止や日程変更などはほとんどの卒業生が体験しており、就職準備が十分に行えないことに不安を感じていたのではないかと推察できる。また学外実習の経験が少ないことを心配した卒業生のうちのほとんどが技術力の不足を感じていた。さらに現場でのコミュニケーションやその他の業務についても心配しており、実習経験の少なさが様々な心配を引き起こしたと考えられる。

回答者のうち 38.6%が学外実習中止や短縮を補うための配慮や研修等を就職先で受けたが、61.4%は特別な対応を受けなかった。経験が少ないうえに特別な配慮が行われないことが、卒業生をさらに心配させたかと推察できる。

一方、就職して4か月経った今回の調査時に「学外実習の中止や短縮の良くない影響を感じている」のは32.1%、感じていないのは67.9%で、影響を感じていない方が多かった。入職時には心配が多かったが、長めの新任研修など病院や施設側の配慮を受けたことや、実際の業務に関わり始めたことで少しずつ心配が解消していったのではないかと考える。